

## ケンロクヒサカキの新産地

|       |   |
|-------|---|
| 著者    | 清野 嘉之, 井鷲 裕司  |
| 著者別表示 | Kiyono Yoshiyuki, Isagi Yuuji   |
| 雑誌名   | 植物地理・分類研究   |
| 巻     | 37  |
| 号     | 2   |
| ページ   | 100-100   |
| 発行年   | 1989-12-25  |
| URL   | <a href="http://doi.org/10.24517/00055970">http://doi.org/10.24517/00055970</a> |

解剖学的特徴のほとんど、すなわち、単独管孔および数個が放射複合する管孔の配列、階段穹孔と階段状壁孔を有する道管、狭い帯状の独立柔組織、異性放射組織(クリプスのタイプII AまたはII B)、そして放射組織における油細胞の存在などはモクレン科の材の特徴であり、従来の記載に一致するが、いくつかの相違もみられた。このうち *Talauma* の4種は管孔が角張る、道管要素と繊維状仮道管が長い、階段P孔の横線数が多い、多列放射組織の縁辺が高いなどの特徴を有し、解剖学的観点からは他2属のものより原始的である。*Aromadendron* と

*Talauma* 間の材解剖学的識別に関し、CANRIGHT (1955) はいくつかの特徴で両者を区別できるとしたが、本研究はCANRIGHTとは異なる特徴で両者を区別できる結果を得た。すなわち、*Talauma* の4種は1)道管要素と繊維状仮道管がより長いこと。2)階段状穹孔板の横線数がより多いこと。3)繊維状仮道管の壁がより厚いこと。4)単列および多列の放射組織がより高いこと。5)多列放射組織の縁辺細胞の数が多いこと、で *Aromadendron* の1種と異なる。

(Received June 1, 1989)

○ ケンロクヒサカキの新産地(清野嘉之・井鷲裕司) Yoshiyuki KIYONO and Yuuji ISAGI: New Locality of *Eurya japonica* THUNB. var. *ovata* MASAMUNE et SATOMI.

1987年11月に広島県(広島営林署花茎山国有林:標高280m)のアカマツ林で、楕円体の果実(Fig. 1)をつけたヒサカキを1株見つけた。似たものにケンロクヒサカキ(正宗・里見, 1954)があるが、その果実は卵形体と報告されている。しかし、ケンロクヒサカキが天然分布する石川県金沢市では、楕円体の果実と卵形体の果実をともにもつ個体が見られるので、本品はケンロクヒサカキの一型と考えられる。京都市の桃山御陵照憲皇太后陵参道ぞいにも楕円体の果実をもつ個体(植栽)がある。ケンロクヒサカキの天然分布は石川県以外では報告されていないようであるので、ここに新産地として報告する。このケンロクヒサカキは、地際直径4cm、樹高2mで、周囲のヒサカキが同3cm、1.5m程度であるのに比べて大きく、生育はよい。

(〒612 京都市伏見区桃山町永井久太郎官有地 農水省森林総合研究所関西支所, Forestry and Forest Products Research Institute, Kwansai Branch, Momoyama, Fushimi, Kyoto 612)

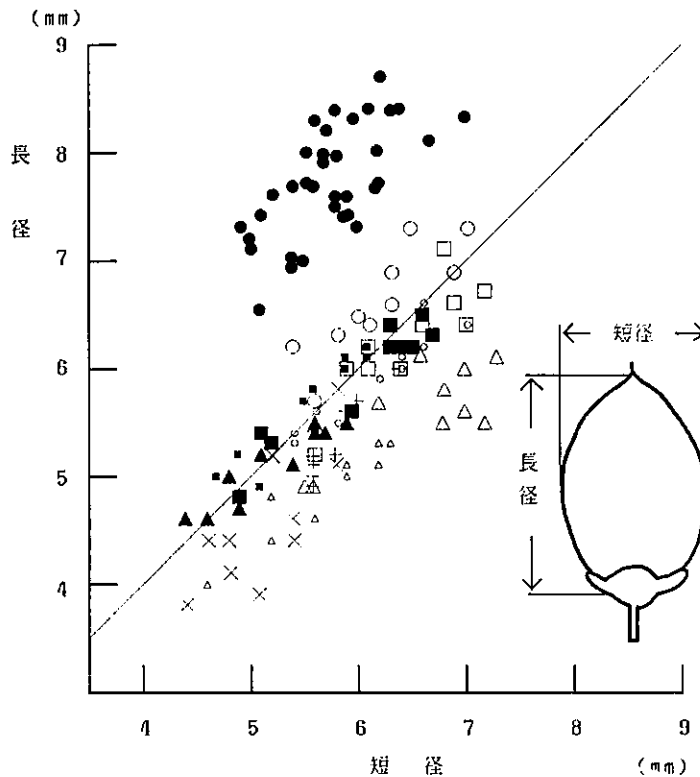


Fig. 1. 漿果の短径と長径の関係 シンボルは個体の違いを表す。●はケンロクヒサカキ、ほかは周囲の普通のヒサカキ。